

んどみられず、ラテン語用語はこれを理解し得なかつたようであるがオランダ語用語はこれを正しく訳し、また、他の図書を参照して注を加えるなど、読者に本書の内容を理解させようとする努力が各所にみられる。

(名古屋大学医学部解剖学第一講座)

稲村白羽(三伯)の「金匱方註」について

中山 沃

先年演者は稲村白羽(三伯のあきな)述の写本「金匱方註」一冊(一九・五×十三・四四)を入手した。一頁十行で、杏樹堂とした野紙に書かれている。そして凡例七枚、目錄二枚、本文四七枚、計五六枚である。凡例の文末に「于時天明四年甲辰季冬、因幡州稲村白羽誌」と書かれている。卍は村で、白羽は三伯の字、季冬は十二月である。

「目錄は処方目次で、五三の煎薬と一つの丸剂名が書かれている。本文第一頁の一行目に「金匱方註卷一、因幡州稲村白羽述」とするされ、桂枝湯方以下五四の処方の成分とその割合、方の趣(効能、適應症)が、三伯自身の考も入られて書かれている。そして末尾に「新撰金匱方註卷一終」とあり、以下続巻があることを思わせる。なお凡例の第一頁欄外に「石田」と「窟」の二つの朱印が押しであり、裏

表紙の内側に「敵島之詩、唐人作」と「天橋立」の二篇の詩が書きつけられ、別筆と思われるが、「克己堂」と詩の傍にしるされている。

この写本の字は幼拙で、誤字も多く、とても稲村三伯の字とは思われない。少年の字のようである。三伯の生年は宝暦八年（一七五八）なので、この凡例の書かれた天明四年（一七八四）十二月には満二七歳であった。三伯の若い門人が写本したものであろう。

三伯は明和七年（一七七〇）十三歳で鳥取藩医稲村三杏の養子となり、十四歳で藩校尚徳館に学び、安永五年（一七七六）十九歳の時、藩医難波玄生の子春庵と共に福岡の医亀井南溟の塾に遊学した。一―二年在塾したのち帰郷したが、天明元年（一七八一）十二月養父三杏死去のため、翌二年家督を相続し、五人扶持四〇俵を給された。天明三年三月京都へ遊学したが、同年十一月藩主池田重寛が死去したので帰国した。天明五年二月、三か年の予定で再び京都に遊学した。したがってこの「金匱方註」を撰述したのは、この第二回目の遊学へ出立する直前の鳥取在任の時であった。三伯が大槻玄沢の芝蘭堂に入門し、蘭方に転ずるまで

の医学の師については、従来亀井南溟しか知られていない。京都における師も不明である。しかしこの写本の凡例や本文中の文から、三伯の学統や師を推量することができ、すなわち凡例の中で、晋唐以来の医師達が古方を棄てたことを非難し、張仲景に帰ることを主張している。また「永富独嘯庵曰ク、傷寒万病ヲ治シ、万病傷寒ヲ治ス、回互参究、初テ傷寒ヲ治シ亦初テ万病ヲ治スベシト、嗚呼卓乎タル此言、実ニ方技家ノ龜鑑」と述べ、独嘯庵に傾倒している。永富は山脇東洋に師事し、東洋また永富の才を愛し越前の奥村良筑のもとに子息東門と共に遣し、吐方を学ばせたほどである。前述の南溟は永富の門弟で、永富の著「漫遊雜記」に序文を書いている。また凡例中に「村井忠山著ス処ノ藥量考、陶弘景及び物徂徠ノ説ヲ考比シ、参ユルニ自己ノ見解ヲ以ス」とある。「藥量考」は吉益東洞の門人村井琴山の著書であるので忠山は誤写である。山脇東洋の嗣子東門は天明二年に死去しており、孫の東海が継いでおり、三伯より一つ年上の二七歳で師と仰ぐには若すぎ。三伯の京都遊学の折には吉益南涯（三四歳）、東洞の門人和田東郭（四十歳）らがあり、これらの古医方家の門を敲

いたのではなからうか。しかし「蘭学階梯」を読み、寛政四年（一七九二）江戸勤務の折芝蘭堂に入門したと伝えられているが、独嘯庵の「漫遊雜記」中の西洋人の病理解剖についての記述を読み、蘭方への志は拵がっていったのではなからうか。

また凡例の末頁に「嘗テ難夫子ニ待坐シ、其ノ聞ク処ノ衛氣畏縮ノ説及ビ藥論ノ義ヲ推シテ漫ニ此書ヲ彙集シ同志ノ友ニ献日ノ愚ヲ致サントスルモ云々」とある。難夫子とは、かつて三伯の師である。おそらく亀井塾へ同行した難波春庵の父玄生（一七三七—一七八三）と考えられる。玄生は米子の医師永原養順の子で、鳥取藩医難波養牛となり、養父から医学を学び、安永七年（一七七八）養父の死により家督を継いだ。天性聡敏で医学で高名であり、「難経解」その他の医学を著述したという。また国学にも造詣が深く、和歌も詠じた。難夫子の名は処方の「小青竜加石羔湯方」の註の中にも見える。すなわち「頃日余ガ社兄中村三育、小青竜加鳥頭二両ノ方ヲ伝フ、喘家其初スル時必ズ噍シテ清涕出ル事数回ナルモノニ効驗アリ、此方難夫子造ル処ナリト余受テ其方ノ趣ヲ考ルニ云々」と書かれている。

この社兄中村三育は難波玄生の塾における同門の医師と考えられるが、不詳の人物である。なおこの金匱方註は「深ク自ら秘重シテ門生ト云共妄リニ授ズ、時々消閑ノ具ニ供シテ但ニ玩読スルノミ」のものであった。この文から、鳥取在勤の折には門人を教育していたことが判る。なお各処方についての三伯の考えなどに関しては諸賢の研究にまちたい。

（岡山大学医学部第二生理学教室）